

なぜ日本の、組織のトップはいま命を賭けないのか

東電の会長が今回の原発事故に関して記者会見を行っていましたが、企業のトップとして命を賭けているという気迫は全く感じられませんでした。この事態の収拾後責任を取って辞任することや、私財の提供の明言もない、単なる陳謝のありふれた会見でした。体調を崩した社長は入院している有様で、這ってでも現場の第一線に立って陣頭指揮するという光景は見られませんでした。部下の社員や「協力会社」の作業員たちが事故現場で死に物狂いで奮闘しているというのに、病院のベッドに横たわっていたのです。こんな重大危機に直面して力を振るえず、倒れて不在するようなトップとは一体何なのか、と啞然とせざるをえません。

平時はどこにいるかわからなくても、非常時の際には前面に出て指揮をとり、リーダーシップを強気に発揮するというのが、超高給取りのトップの役割であったはずですが。トップが世間向けの陳謝しかできなかったり、入院して不在するのであれば、もうこれはトップでもなんでもないでしょう。少しでも見識があったなら、自分はトップとしてふさわしくないことを自覚して、即座に辞任しなければなりません。もちろん、そんな気配は微塵もみられず、東電はこんなトップを擁してきたのです。今回の事態で東電が矢面に立たされたから、明るみに出てきただけのことで、おそらく日本の大企業のトップに共通する問題かもしれません。

極東軍事裁判において平和に関する罪で裁かれた A 級戦犯の被告人が、「自分には責任がない。違和感を感じたが、空気に逆らえなかった」という趣旨の証言をしましたが、この裁判じたいの問題は看過しえないとしても、戦時日本の指導者はこの程度であったし、戦後もこの程度のトップが大企業に君臨してきたことを、東電のトップはさらけ出しました。いうまでもなく戦艦大和の最後を共にした艦長や、戦時中に沖縄県知事を引き受けて死地に赴いた役人もいたし、敗戦直後割腹した大臣もいましたが、命を賭けて責任を取った上級幹部クラスは少数で、大半が生き残りました。

“鯛は頭から腐る”という言葉がありますが、組織も頭から腐ります。「全身全霊命がけ」を繰り返す首相も、今回の大震災に命を賭けられないから、言葉ばかりを強調せざるをえなくなっています。初動時に安全保障会議や中央防災会議を開いて、警察法 71 条及び 72 条に基づく緊急事態を布告し、日本の危機に対処する体制をつくるべきであったのに、非常時におけるトップの役割というものがわかっていなかったのです。東電のトップといい、日本国のトップといい、我が日本国民はそんなトップしか持っていないことを思い知らなければなりません。

大きな権限を与えられ、最大の責任を負っているトップは、ここで命を賭けなければ、どこで命を賭けるのか、といった国難に真正面から向き合うことが課せられています。にもかかわらず、これらのトップからは言葉以外の死力を尽くしている格闘はつゆほども感じられません。このトップたちはもともと命を賭ける能力も根性もないまま、トップに就いたとしか考えられません。トップの地位に居続けることだけが目標だったのかもしれません。命を賭けられないトップを擁してきた私たち日本人は、私たち自身が戦後復興という口当たりのいい言葉の中で、命を賭けるべきなにも見出さないまま、戦後 66 年を空虚に過ごしてきたことを見つめる必要があります。

40 年前に自衛隊に乱入して割腹自決した高名な作家は、行動者として戦後日本が深く見失ってしまったもののために、命を賭けたという気がします。戦後日本に「ある」もののためではなく、「な

い」ものために血刀を振るったにちがいありません。命を賭けられないトップは、命を賭けられない戦後日本のありようを示しているのです。命を賭けて戦後日本の平和と民主主義を獲得してきたわけではない戦後日本人は、なにものにも命を賭けないことが至上の価値とされてきました。しかし、戦時中にトップがどんなに腐っていようと、戦場では砲弾に貫かれながら前進しつづけた兵隊が膨大にいたように、東電や日本のトップがどんなに無能無策であろうとも、原発の事故現場や被災地で命の危険にさらされながら、作業に従事している人たちが多数存在しているのです。

そのような末端の人たちがあらん限りの力を振り絞っているのに、安全地帯にいるトップたちが無能無策でいることを許されているとは、なんと不条理で腹立たしいことなのか。書きながら、憤りが地震のように心の大地から何度も突き上がってきますが、本当に恐ろしいのは、大地震や大津波や、原発事故であるよりも、マグニチュード9以上のトップたちの無能無策の大きさである、とつくづく思われます。バカ足すバカはバカと、ある政治家は本当のことを吐きましたが、いや、それでも不十分で、バカ足すバカはより大きなバカと訂正しなければなりません。

4月9日付の読売朝刊に、元原子力安全委員長の松浦祥次郎氏が「崩壊した安全神話」「原発開発世代の責任」と題して陳謝し、「『安全であるべきだ』がいつの間にか『安全であるはずだ』という過信にすり替わり、専門家も思考停止に陥っていたのでは」という聞き手に、「そんな思い上がりがあったとしたら大間違いだ」、「現在の委員が情報を十分与えられているのか分からないが、国民への説明責任はもっと果たすべきだ。放射性物質の拡散予測を事故後もっと早く公表しなかったのは極めて残念だった」と答えています。「日本の組織は構成員の利益を重視し、悪い意味でのムラ社会になりがちだ」と指摘して、「最悪のシナリオ」にこう答えているのが、注目されます。

「大切なのは最悪の状況を認識し、それを防ぐ手立てを考えること。社会を^{あんど}安堵させる情報を流すだけではいけない。最悪なのは、新たな水素爆発で格納容器が破壊され、放射性物質が大量に流出することだ。近くには立ち入れず、他の炉も手が付けられなくなる。こうなると日本にはもう解決策がないと思う。放射性物質の放出量はチェルノブイリの事故を超えるだろう。こうした事態は何としても防がないといけない。窒素注入はそのための手段だ」「何よりも水を循環させる本来の冷却系を復旧させ、炉を安定させることだ。併せて別の冷却系の付設も考えるべきだろう。それらがうまくいかない場合は外からの注水が続けるしかないが、冷やし切るのには時間がかかる。数か月ですめば上々、数年かかるかもしれない。その間、汚染水の処理が大きな問題になる」

「決して勝てない戦争だ。放射能は人間の知恵で消せないからだ。一方、負けてはならない戦争でもある」が、「現場の作業員」に自分も「付き添い、放射線測定などを手伝いたい気持だ」と述べ、「原子力の将来」について、「国民と一緒に議論していくことが必要だ」と、これまで国民が置き去りにされてきたことを示唆しています。原子力関連のOB16人と《事故を陳謝した上で国を挙げた対応を求める緊急提言を発表した》氏の元に、「いたずらに社会に不安を与える」という原子力関係者からの批判メールが届いたことに、記者は《情報を公開した上で最悪にも備える》のが今回の教訓なのに、《どこか勘違いしていない》か、と呆れます。

こんな日本の閉塞した現状の中で、おそらく命を賭けて真摯に提言する氏の姿はかすかな希望であり、日本のトップも組織のトップも命を賭けられない体たらくでも、被災地で救助するために自分の命を投げ出した20名以上の警官と無名の人々が少なからずいたという事実こそは、戦争の膨大な犠牲者を忘れてきた戦後復興の途を再び繰り返してはならないことを、いま生きている私たちにいつまでも訴えつづけているにちがいありません。